

外傷について

門別診療所 富里 美緒

繁殖シーズンが終わり離乳やセリなどで馬の移動が多い時期となりました。環境の変化によって怪我も増えたのではないのでしょうか。軽い怪我については獣医師を介さず牧場内で対処されている方も多いと思います。しかし、どのような時に獣医師に連絡するか迷われる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？そこで今回は傷の種類と治療についてご説明したいと思います。以前掲載された「創傷の治癒について」の記事と重複する部分もありますが改めてご紹介させていただきます。

まず傷が塞がる過程は主に一次癒合と二次癒合があり、一次癒合は縫合することで傷の辺縁が密着し、ほとんど瘢痕が形成されない状態を指します。治癒までの期間が短く傷跡がきれいに治りますが、縫合時に労力と費用がかかり放牧の制限も生じます。一方二次癒合は傷の部分に肉芽組織が作られ、収縮することで治癒していきます。時間がたっている、感染が起こっている、異物が残っているなどの理由で縫合できない場合はこの治癒過程をたどります。また、縫合した後に傷が開いてしまった場合も二次癒合となります。時間のかかる処置や放牧制限はありませんが治癒するまでに時間がかかり、骨まで達した傷では治癒までに3ヶ月以上かかる症例もあります。また余計な肉芽組織が盛らないように傷の状態に合わせたケアが必要です。

次に傷の種類と治療方法についてご紹介します。馬でよく見られる傷には擦り傷(擦過創)、切り

傷(切創)、皮膚が裂けた傷(裂挫創)、刺し傷(刺創)などがあります。擦過傷は比較的浅い傷で縫合の必要がないことがほとんどです。傷を洗浄し感染をコントロールすることで多くの場合自然に治癒します。しかし、膿が出る場合や皮下に感染が広がるフレグモーネに移行した場合は抗生剤の投与が必要になります。切傷と裂挫創は早期に縫合をすることで一次癒合を目指すことができる傷です。傷の汚れ具合や種類にもよりますが一般的には受傷後6～8時間以内であれば問題なく縫合できると言われています。さらに傷んだ組織を除去することでより時間が経過した傷も縫合できる場合があります。よってこれらの傷を発見した際はできるだけ早く獣医師に連絡することをお勧めします。また縫合できない場合でも洗浄や傷の保護など適切に肉芽組織を盛らせる処置が必要となります。刺創は感染が起こりやすいため多くは縫合せず二次癒合となります。傷口が小さく一見軽症に見えますが、深部まで感染が起きたり、異物が残っていたりするため洗浄の他にも超音波検査をすることがあります。

今回ご紹介したとおり傷の治り方や種類は様々であり、治療をする際は毛刈りや洗浄をすることで傷の状態と種類を見極めることが重要となります。また洗浄は感染を防ぐ手助けにもなります。しかし、このような処置には鎮静が必要な場合が多いため傷を発見した際はぜひお近くの獣医師にご相談ください。

